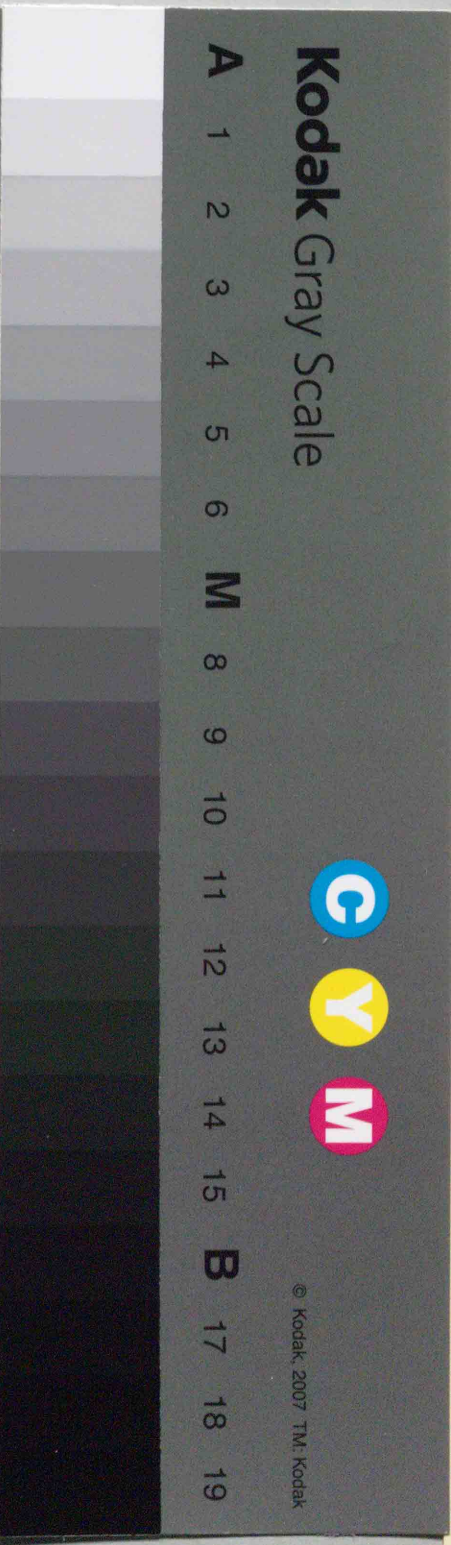
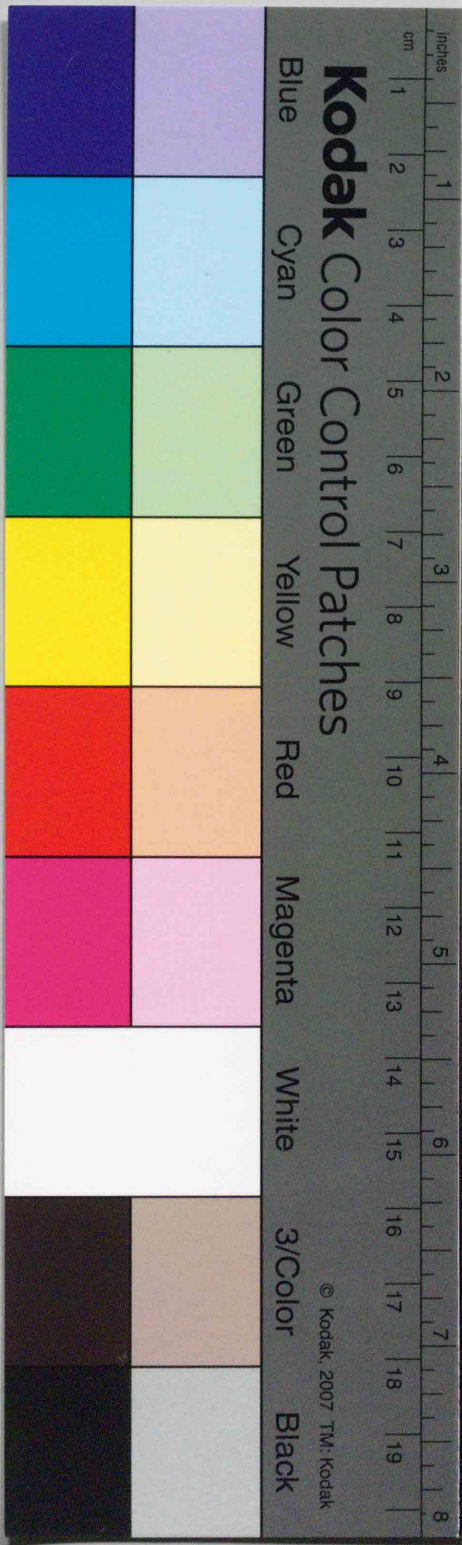


7
930
明32

の 婦 裁 縫 獨 案 内 全
 の 宥 裁 縫 獨 案 内 全
 附 女子禮式の圖



30531

教科書文庫

3
920
32-1899
20000 69/86



7
930
BA32

室料書館
中央圖書

後部先生編輯

婦女の
の言

裁縫獨案内

附 女子禮式乃圖

東京 盛花堂藏版



女子の裁縫を為すは、男子の業を為すに似たり。男子の業は、社会の用を為すものなり。女子の業は、家庭の用を為すものなり。裁縫は、女子の業の第一なり。裁縫を知らば、一家の経済治り難し。裁縫は、女子の業の第一なり。裁縫を知らば、一家の経済治り難し。裁縫は、女子の業の第一なり。裁縫を知らば、一家の経済治り難し。

裁縫を知らば、一家の経済治り難し。裁縫は、女子の業の第一なり。裁縫を知らば、一家の経済治り難し。裁縫は、女子の業の第一なり。裁縫を知らば、一家の経済治り難し。裁縫は、女子の業の第一なり。裁縫を知らば、一家の経済治り難し。裁縫は、女子の業の第一なり。裁縫を知らば、一家の経済治り難し。

裁縫は、女子の業の第一なり。裁縫を知らば、一家の経済治り難し。裁縫は、女子の業の第一なり。裁縫を知らば、一家の経済治り難し。裁縫は、女子の業の第一なり。裁縫を知らば、一家の経済治り難し。裁縫は、女子の業の第一なり。裁縫を知らば、一家の経済治り難し。

裁縫の要

編者後





目録

裁縫の大意	一	大巾物衣服裁方	二十一
雑巾のさし方	二	縮布類大人物衣服裁方	二十三
脊紋の縫様	四	袴の縫方	二十四
縫ひ方新方	四	綿入の縫方	二十五
衣服を裁ちたる部類の名稱	六	羽織の裁方	二十七
衣服裁方	七	女物羽織の裁方	二十八
一ツ身襦袢裁方	八	絹類羽織の裁方	二十九
四ツ身襦袢裁方	七	單羽織の縫方	三十一
小児一ツ身單物の縫方	六	袷羽織の縫方	三十二
一ツ身袴の縫方	七	綿入羽織の縫方	三十三
一ツ身綿入の縫方	八	シャツの裁方	三十五
三ツ身の衣服裁方	七	袴の裁方及縫方	三十六
絹布類三ツ身の裁方	五	腹掛の裁方	四十一
四ツ身の裁方	五	股引の裁方	四十三
大人衣服の裁方	九	大黒頭巾裁方	四十四
		巾着裁方	四十五
		紐足袋裁方	四十六

上欄目錄

- 起居の心得
- 進退くときの心得
- 座敷の内歩行方心得
- 拜礼の心得
- 行遇の礼心得
- 戸障子襖開閉の心得
- 主客應接の心得
- 烟草盆の出し方
- 火鉢の出しやり
- 茶の出しやり
- 菓子を進めやり
- 燭臺の扱ひやり
- 書物繪巻物の類進めやり

- 掛軸の扱ひやり
- 吸物膳の進めやり
- 盃及び酒の進めやり
- 本膳の進めやり
- 飯の進めやり
- 取肴の進めやり
- 茶菓子の進めやり
- 客人着席の心得
- 席上鼻のかみやり
- 茶をのみ又菓子の食べやり
- 膳の受方酒の受方及び箸の取りやり
- 飯の食ひやり
- 小袖不織の類着せや
- 袴の着せやり

婦女禮式法

禮式は貴賤長幼の秩序を正し品位の區別を明とするの式法にして賢愚正邪に關すこのものなれば一日も缺くべからざるあり殊に婦女は温順を旨とし容儀端正にして面赤怒色をあらはさずよく父母長者不事へ夫を敬ひ舅姑を貴び又兄弟姊妹の間にも自ら禮儀ありて友愛の道を盡すべきこと

裁縫獨案内

○裁縫の大意

裁縫は婦女の業務中最も必要なるのみならず其技の巧拙によりて其人の品位賢愚も知らるるものなれば勉めて斯道を學ばざるべからざるは先第一ふ針の運び方を習ひ其針目の等しく整ふやうにまべし乃で此針の運び方を練習するに先雑巾をさすことを初とす左に之を示すべし

○雑巾のさし方

雑巾は木綿の布片を二重又は三重と為し麻絲又は木綿絲にてさそべし布片の幅は一尺位のものよりさし始むるをよとす其刺方の種々あれども左に示す圖の如きものを以て其針の運び方を達者にまべし決して雑巾なりとて粗

と肝要あり依て今茲に其禮式の一斑を示し立居擧動の作法を述ぶべし

○起居の心得

婦女座を立つときは右の手を膝の上に置き左の手の指頭を膝の脇の方につけ腰を

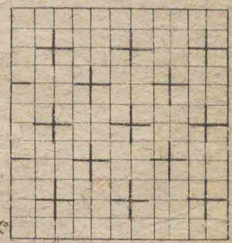


たて足の爪先を立て右の膝を少し揚げ身軀を起すお随ひ左の足をそろへて立つか又坐るときは右の足を少し進めひざまづき左の膝をそろへ右の足の拇を重ねて坐り両手を膝の上におくべし又貴人の前に坐するときには両手を膝の両側みつくべし

○進退するときの心得

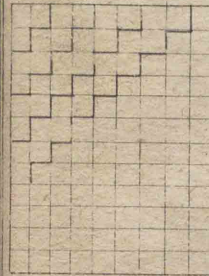
略に述べくらむ

十字字

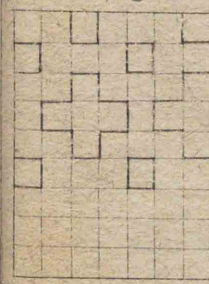


十字字は先縦横に同じ寸の線を篋にて着け更に又其間を三つに割りて圖の如く十字形にさすべし其篋を用ふるに少しにても寸分の違ふことあらば十字字の出来て見苦しきものなり是最も運針の初歩なれば随分心付るを肝要とせ又二本線にてさすときは線のよきぬやりにすべし

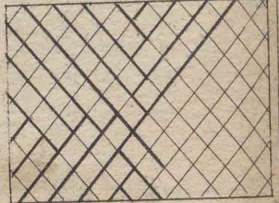
ごしばんだ



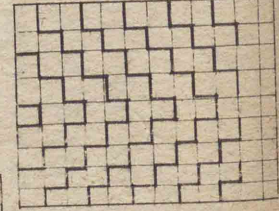
たがりぎち



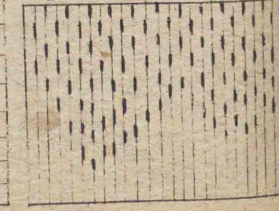
たがりじあ



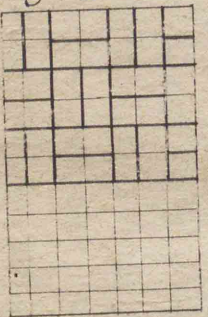
べらをつ九



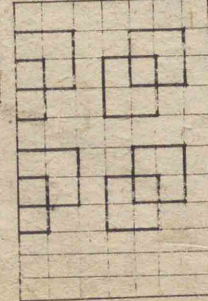
しざぎや



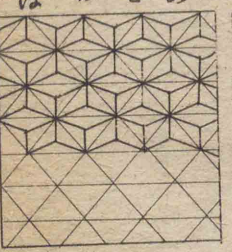
しづくニ



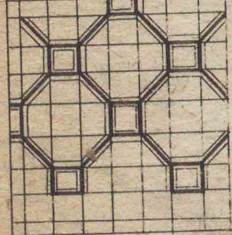
ぎなつくか



はのさあ



きしに重ニ

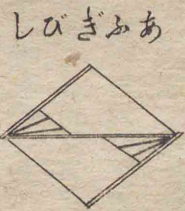
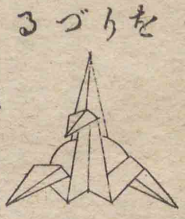


太き一重は二度ざにて細き線は一度ざにてなるなり

進み行くにも両手を膝の上ふさげ臂を張らずして肩のいかりぬやうなひらかあし腰を屈めず胸を突出さむ指先をそらせ踵をつけてすらくと歩むべし又立戻るときは手を下げること前の如くに為し腰を立て足を爪立て右の膝を少しあげて右座の方へ少し向き立ちて下座へまたり戻るなり但座の模様によりて左へひらくときも右に反對するなり回り方は大概床の方へ向き回るものと心得べし

○座敷の内歩行方
歩むふは大股ふすべからず殊座敷を歩むふは敷居又畳の縁を踏むべからず徐々として過ちなき様注意すべし歩行して塵埃を立つは失敬なり

○脊紋の縫様
脊紋は小児の衣服の脊に縫ふ紋にして一際目立つものなれば殊に注意すべし其縫方は紙小模様を畫き縫ふべき處に宛て其隅々を篋にて痕をつけ紙は取除けて其痕をさむべし



るづりを縫ひ方
縫ひ方
縫方に種々あり其重なるものを○一針ぬきと云ふ表より裏へ裏より表へと一針づぬきて縫ふを云ひ○雄縫と云ふは糸目の表へ出づること少く雌ぬいと云ふは表へ糸目の出づること多きを云ひ○女夫縫と云ふは表へ糸目の出づること或は少く或は多くなるの如し○返し縫と云ふは已に縫ひたる處を再び戻して縫ふなり○合せぬいと云ふは二枚を一つにして縫ふことなり
紵方は先紐を紵習ふべし其法は先布片を二つに折りて紵んと思ふ幅にちりをつけ若心を入るものなれば其心を向ふの方の縫こみよ一つおくみ左と右のかしらをぬひて其心を綴つけをれより二三分又は三四分づに紵るなり但幅不同なきやう注意すべし
次に端縫を習ふべし端縫は風呂敷前垂腰巻などの端を縫ふことあり總て端ぬひは布片の端を一分程に二度折りて裏の方小折込み曲らぬやうに縫ふべし又は一ぬひお紵ることあり是は其品によりてのことなりことごとく然るにあらす

の如し○返し縫と云ふは已に縫ひたる處を再び戻して縫ふなり○合せぬいと云ふは二枚を一つにして縫ふことなり
紵方は先紐を紵習ふべし其法は先布片を二つに折りて紵んと思ふ幅にちりをつけ若心を入るものなれば其心を向ふの方の縫こみよ一つおくみ左と右のかしらをぬひて其心を綴つけをれより二三分又は三四分づに紵るなり但幅不同なきやう注意すべし
次に端縫を習ふべし端縫は風呂敷前垂腰巻などの端を縫ふことあり總て端ぬひは布片の端を一分程に二度折りて裏の方小折込み曲らぬやうに縫ふべし又は一ぬひお紵ることあり是は其品によりてのことなりことごとく然るにあらす

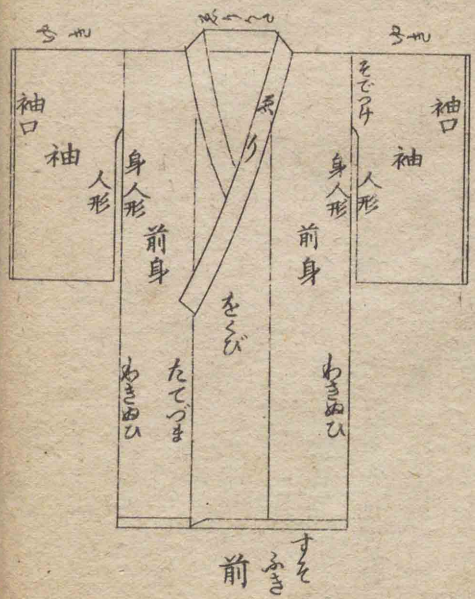
○拜礼の心得
礼を為すにハ左右の手先を向ふ不為して揃へ臂を下り両手の拇と食指とをつき合せ其上へ面をつけ腰の高くあらぬやう脊を平々にして拜するなり



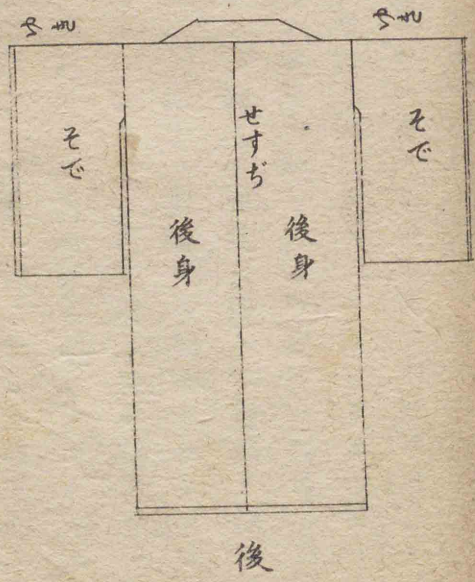
又立礼ならば左右の手を膝頭まで下げて拜するなり又椅子に在りて人小礼するハ椅子ををなれて立ち少し膝へよりて両手を膝がしらまで下げて拜すべし但立礼は拜するとき膝ならひ小臂の曲らぬやう心付くべし

○衣服を裁ちたる部類の名稱
前身 後身 衿 衿方 袖 袖付 人形 身人形 腋 衿下 裾 脊 衺 紐付 等なり

衣服全體の圖



同背面の圖



○衣服裁方

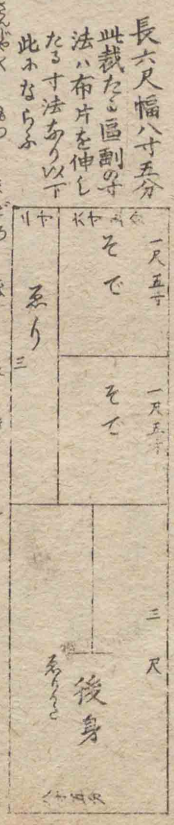
衣服の裁方は最も丁寧なまにし若一缺ふても誤其形全うらず故小能く反物又は布片の寸尺を度りて之を見積り假し印を付置きて後より剪刀を入るべし



の方へ一足開き例の通り両手を膝頭まで下げて敬礼すべし其人我前を過去りたるるとき進みゆくなり若同輩の人なれば三尺など前にて互お右の方へ斜に去り一礼して同時に進み行くべし

終らば其寸尺を考へて縫つけを為し夫より始めて縫かゝるべし
始めて裁縫を習ふ人ハ最初より裁方縫方小かゝらず先袖のこゝらへ方裾の付方などを學ぶべし左は其次第を追ふて示すべし

○一身襦袢裁方



長六尺幅八寸五分を以て身頃と為し之を切りて餘の三尺にて衿と袖とを取らるなり其方先幅二寸を左右とも餘く揃へて折目を付け之を衿として切り其餘を二つ分ちて左右の袖と為し身頃ハ二つ小折り前身の處ハ正中を二つは切り更不衿

○戸障子襖開閉の心得

戸障子ふすまを右の方へ開けるに先火し右の方へよりてひざをつき左の手を引手へつけ火しあけて右の手を敷居際より四五寸ほど上りたる所の縁へかけよき程に開くべし夫より立ちて相を越し右へ回りあけたる障子襖の方に向きてひざまづき

肩を左右へ四分つゝ合せて八分切るべし但是は本法にて一生児お著せるものは左に示すが如き寸法にてよゝゝく通例皆之を用ふるなり



縫やうは初に袖をこゝらへ次に身頃を取りて袖付の方を四分程残し其他は浅く縫ふて引返し裏の方を見て袖丈の印の方を縫ひ又引返し表を出し袖幅の印をつけ八口をくけ次に後幅の印をつけ馬乗の處より身の八口の處まで脇縫を為し其縫目は前身頃の方に折をつけ次に馬乗の方をとちつけ裾口は端縫と同く二分位の幅に三つに折て之を縫ひ夫より袖をつけ八口をとち次に前幅の印をつけ



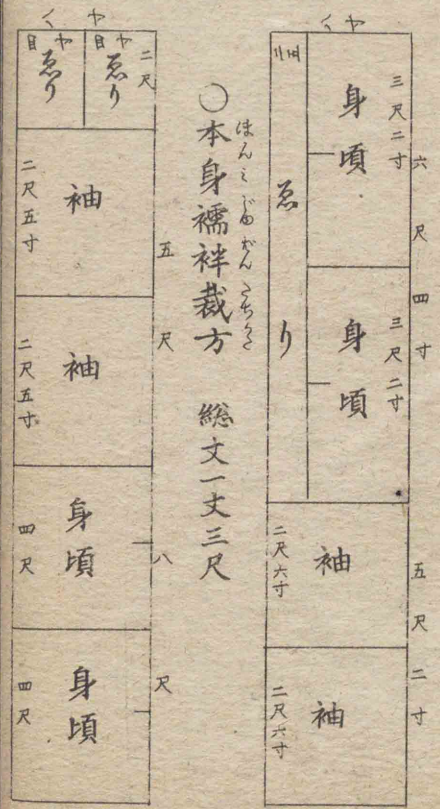
左の手にてあらまし
閉ぢ右の手まで閉き
るあり若左の方へ開
るときは之に及對す
るなり又建具の開閉
ハ静かして柱へ閉付
る音などせぬやうに
心付くべし
○主客應接の心得

他人の家に行きま
るとき先玄關などに
て案内を乞ひ取次の
人の先導おていつき
へなりとも通るなり
諸先方の人貴人をれ
を柵の外ま坐して拜
礼すべし主人此方へ
と挨拶あるとき静に
起ちて柵を越し前の
如く拜礼をべし用事
なすて歸るときも亦
前の如く一應拜礼し
起ちて柵の外へ出で
正面に向ひ拜礼して

裁縫蜀蓆の

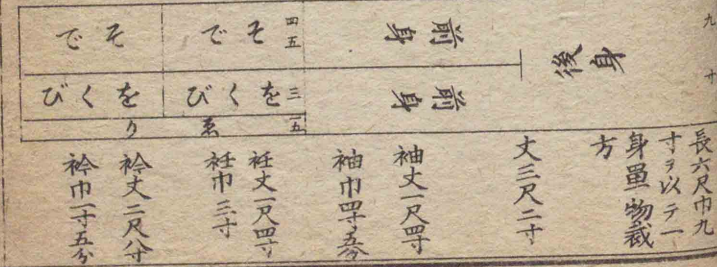
て衿を縫付其縫目は衿の方に折を付て衿巾の印を為し衿
先の縫込とある所を二分許小中にてぬひ其縫目を裏の方
に折を付て衿を紵るなり此他三身は大抵同法あり依て此
處には四身襦袢本身をぬむんの裁方を示すべし

○四身襦袢裁方 丈一丈一尺六寸



○本身襦袢裁方 総丈一丈三尺

縫方は袖を表より一をいにぬひ裏より
縫返して脊筋をぬひ次に脇筋をぬひハ
口をあけ袖をつけ裾を端ぬひにすべし
○小児一身單物の縫方はあらかじめ袖
付及びハ口などの篋つけを為して夫よ
りわき縫を為し兩方ともわらわらは衿を
つけるなり衿は細き方を頭と為し巾一
をいに付て後裾をぬふ其縫やうは
端縫はするなり之を終りて衿を付る其
付方は襟口を四寸位衿下りを三寸と
て一方を縫付け八分の衿巾に紵るべし
諸衿を付終らば前以てこゝらく置たる
兩袖を前に篋付せし如くにつけて夫よ

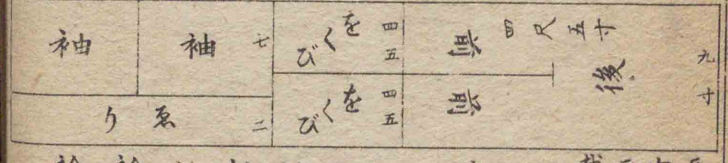


立歸るべし
 上輩の人我家ふ来り
 たまふときは玄閑式
 臺又へ上り口不出迎
 ひ先立して座敷へ通
 ずべし其節座敷入口
 の柵にて左右の勝手
 よろしき方へ開き客
 を座敷へ通し夫より
 柵をにて敬礼し而
 して後柵の内へ入り
 對話すも客の歸
 らるるときは出迎へ
 一所まで先立立ち左
 右のうちへひらきて

り八口をぬひまは
 し是にて出来上り
 とを但衿を付るに
 其一方は裁口みて
 絲のはつれること
 あれば之を二度縫
 にまべし其縫やう
 は表と表を外に
 て一ぱい縫ひ夫
 より返して再びぬ
 ふなり
 下に掲ぐる圖の如
 きも其縫やうはか



長八尺四寸
 巾九寸ヲ以
 テ中一身
 裁方
 丈四尺
 袖丈二尺二寸
 袖巾五寸六分
 衿丈一尺八寸
 衿巾三寸四分
 衿丈三尺三寸
 衿巾一寸七分



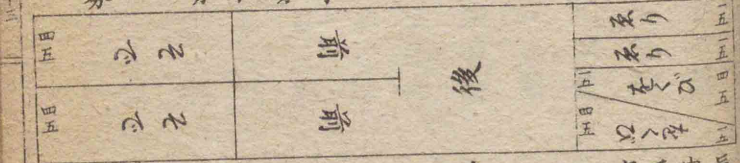
長一丈二尺
 巾九寸ヲ以
 テ大一身
 裁方
 丈四尺五寸
 袖丈二尺二寸
 袖巾七寸
 衿丈二尺五寸
 衿巾四寸五分
 衿丈五尺
 衿巾二寸

拜礼すべし
 若客の同輩あるとき
 は主人二の間に
 ひ一寸一礼して客を
 座敷へ通し何とより
 主人同室に入りて對
 話すべし又客の歸る
 ときは主人へ玄閑式
 は廣敷まで先立して
 一礼を為し別るくな
 り
 若下輩の人來るとき
 は客柵外にて一礼を
 為す故主人は一寸片
 手をつき此方へとい

ことなり只中
 一身は長さ八尺四
 寸の布片大一身は
 長さ一丈二尺に
 て共幅九寸と知
 りんべし
 ○一身衿の縫方は
 先裏袖に袖口を付
 けて襷をけ裏袖
 を向ふに衿表袖
 を向ふに衿表袖
 縫ひ折目は表の方
 へ返し袖巾を度り



長八尺三寸
 巾九寸を以
 て一身裁方
 之を中居り
 の裁方と云
 丈四尺二寸
 袖丈二尺二寸
 袖巾四寸五分
 衿丈一尺八寸
 衿巾三寸八分
 衿丈四尺
 衿巾一寸四分



長八尺三寸
 巾九寸を以
 て一身裁方
 之を中居り
 の裁方と
 云ふ
 丈四尺二寸
 袖丈二尺二寸
 袖巾四寸五分
 衿丈一尺八寸
 衿巾四寸五分
 衿丈三尺三寸
 衿巾一寸五分
 衿巾一寸五分

裁縫術

十五

十二

ひ客室内へ入り上
 両手の指頭をつきて
 一礼し歸るときは同
 間の相際又は次の間
 まで送るなり
 若来客の時夫不在な
 れば取次の者又は自
 分にても上り口にて
 面會し不在の旨を述
 へ客の名刺を受取り
 用事と言置くこと何
 らい念を入れて聞お
 き夫歸宅の上順序た
 ぐへす落なく之を述
 ぶべし

て身頃を縫ひ裏地の方を六分
 伸し置くべし是は襦の見込を
 り儲裏表の丈を能く比べて襦
 印をつけ裾を合せ脊を綴ち脇
 をとち衽をどち衿を付け袖を
 付けて出来上りとを
 ○一身綿入の縫方は大抵衿と
 同じ只綿入は單に縫ひ裾を合
 せ袖をつけたみ付て表の方
 の脊縫を上になし左右小袖を
 開きて綿を入るあり儲袖口は
 綿を含ませてくけ衿をとち堅
 襦八口等を折け又襦綴を為す

長五尺巾 二尺一寸の 大中物を 以て一身 裁方	身總丈 五尺	袖丈二尺 袖巾六寸	衽丈二尺 衽巾四寸	衿丈四尺 衿巾二寸
-------------------------------------	-----------	--------------	--------------	--------------

○烟草盆の出し様
 客来りて座に著きた
 るとき第一番に出す
 は烟草盆あり其持方
 は火入を自分の右の
 方不為し両手にて持
 出で客の前に跪きて
 下不置き両手の柵を
 盆の前の指を盆の
 両横不そへて少し進
 め上座へ回して起ち
 戻るあり又烟草盆を
 下ぐるときも前の如
 く両手を盆の横の方
 へ少し引寄せ両手に

べし
 ○三身の衣服裁方
 下の圖小示すが如
 く其縫方は脊を倭
 ぬひにして折を左
 へ返し其他は一身
 の縫方と異なること
 をし
 ○絹布類三身裁方
 その種類を左に掲
 出す能々圖よつき
 て考ふれば其法を
 知り得べし

長一丈三尺 六寸巾九寸 を以て三身 裁方	身總丈 五尺五寸	前巾四尺五分 後巾六寸	衽丈二尺四寸 衽巾三寸	衿丈一丈一尺 衿巾一丈七分	袖丈二尺八寸 袖巾七寸三分
同上	袖丈二尺 袖巾六寸	衽丈二尺 衽巾四寸	衿丈四尺 衿巾二寸		

裁縫新法

て前の如く持ち一寸
後へさきりて下るな
り



○火鉢の出様
火鉢を出すに三脚即
ち獸面脚炉の如きもの
なれば其一脚を自
分の前あ為し持出で
て客の右の方煙草盆

と角ちかみに置き向
ををなし客の方へ二
つの脚の向くやうに
据へて下るあり若又
角火鉢をれば手くけ
を左右にして進め火
むしは客の右手にす
べし又炭をつぎたる
穴口の總て客の方に
向けるものとす



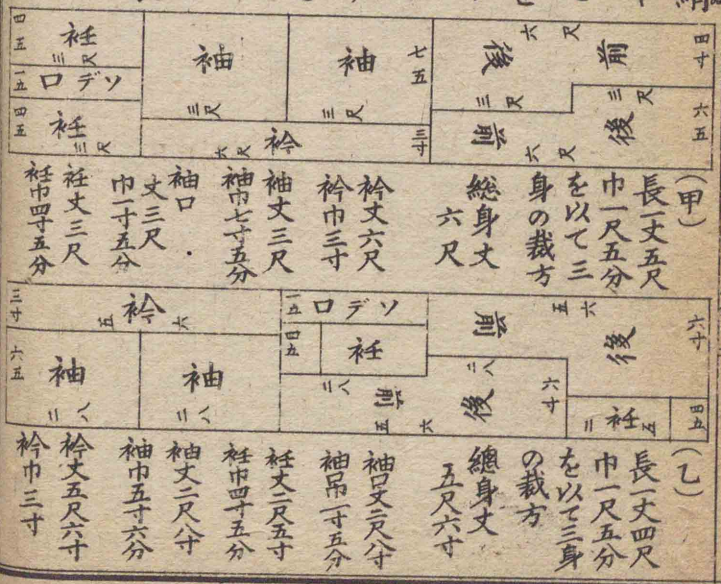
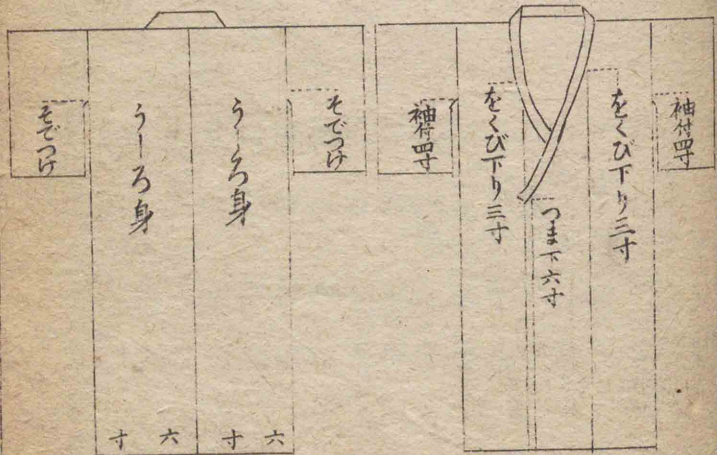
裁縫新法

下に示す所甲ハ絹
類の三身裁方に
て巾一尺五分長さ
一丈五尺の布片を
用ひ乙は片面物の
絹類を以て三身の
衣服を裁つ法あり
委くは圖を見て
知るべし
左ハ三身仕立上り
の圖を出し其要所
の寸法を概ね記す
べし

をくび下りは
三寸を以て目
當とす
つま下は五寸
五分より六寸
までとす
袖付は四寸より
五寸以下とす
後巾は六寸と
すれども布片
によりて巾一
むいふ縫ふべ
し

圖の後

圖の前



より略することもあるべし

○菓子を進めやう

菓子の進めやうは種々あれども通例菓子鉢に盛り箸をそへて是を膳又ハ盆に載せ持出で客の前へひさまつき膳又ハ盆を下置き両手にて少し進め下るなり此時客の前に煙草盆やら客の左の方へ回すより下げ方は煙草盆に同じ是ハ客の右の

カあり故によく其反物の寸尺を度り而して後裁方を工夫せべし

前に掲る上圖は棒裁の法にて之を本裁の通例とす即ち九寸巾二丈八尺の反物にて裁つなり下圖に示したるは之を柳裁の法と云ふ此法は長さも短くして著るべき人の丈高き時に用ふ若反物の長さ二丈五尺の外なきときと雖も此法を斟酌して裁つ小於ては見苦しきことなかむべし又二丈六尺七寸の反物にして尚一の法あり之を本身かざ裁の法と云ふ身丈は三尺八寸五分として前の法より五分短くと雖も亦便利なる裁方なり左ふ其圖を示す但兩袖は前法と同じく五尺八寸を取り身丈も七尺七寸づゝ二つを取るなり



此處身頃あり

方に火鉢のある時の事にて火鉢なけれ

○燭臺の扱ひやう

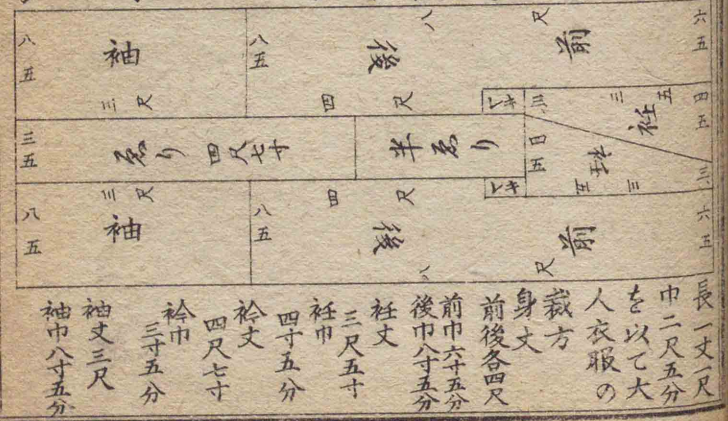
燭臺ハ右の手にて筆を持ち左の手足臺を

右の如くにするときは袷先に六五寸八寸だけの布片を得べし但片面物ふては裁ちがたし

以上の裁方も袷肩のつけはつづも二寸三分あけるを通常とせ又袷巾は三寸五分と記したれども時として三寸八分を取ることあるも袷の狭くなることはなすと知るべし

○大巾物衣服裁方

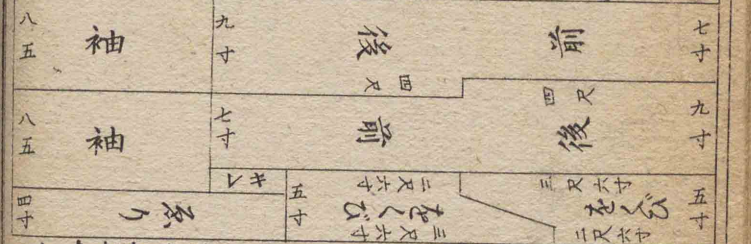
大巾物金中木綿の類裁方下に圖するものは柳裁の法にて次に示すは鑊裁の法と云ふ



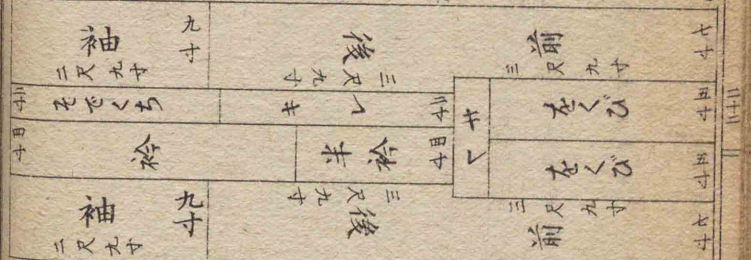
長一丈一尺 巾二尺五分 在以て大 人衣服の 裁方 身丈 前後各四尺 前中各五分 後中各五分 袷巾 三尺五分 袷巾 四尺七寸 袷巾 三尺五分 袖巾 八寸五分

り尤脚二本を上座の
方不すべし若燻剪の
らば其方を下座にす
べし蠟燭のあんを剪
るにも燻壺を左の手
に持ち右の手は燻剪
を持ちながら燻壺に添
へ進み出で、燻臺の
前に跪踏き燻壺を下
不置き燃剪を持ちなが
ら燻壺の蓋を取り向
ふの縁に立ちけ夫よ
り腰をたて右の手に
左の手を添へ燻を剪
り壺に入れ蓋をして

又其次に
示をは金
巾木綿即
更紗など
の裁方を
り之を棒
裁社とい
ふ是最も
便利ある
裁方なれ
ば宜く之
を用ふべ
し



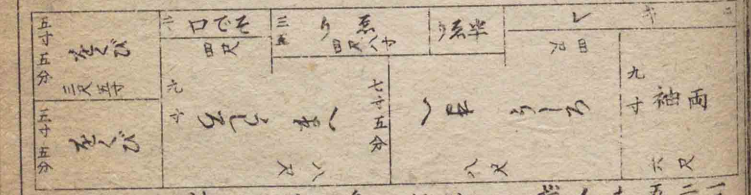
長一丈七
二尺五
分を以
て大人
裁方の
但衿肩
二尺三
分にし
て其他
大抵前
法と異
るな
けれど
も只衿
を大き
くする
るに



長一丈七
寸巾二尺
四寸を以
て裁方
（金巾木綿
通常三尺
巾なり）
身丈前後
各三尺九寸
前巾七寸
後巾九寸
衿丈
三尺九寸
衿巾四寸
袖丈
三尺九寸
袖巾九寸

下へし
○書物繪巻物の類
進めやう
書物又ハ繪巻物の類
尤頃合の廣蓋をどに
載せ両手に持ち徐
に客の前へ進み客の
右の方におくべし若
一冊り二冊程の書物
を進むるに其表題
を自分の方に向け両
手にて持ち客の前に
至るとき右の手にて
書物の右の角を取り
表題の頭を我方に向

○絹布類大人物衣
服裁方
絹布は巾廣くゆつ
たりとしたるを以
て其裁方も亦木綿
と異あり乃ち下に
掲ぐる第一圖は之
を絹類の棒ざらと
云ひ第二圖は八掛
付の裁方にして縮
緬の類巾廣き物不
て裁つものを知る
べし



一尺六寸巾
一丈九寸の
絹を以て
大人衣服
裁方
前八寸
丈八寸
巾七寸
丈九寸
巾九寸
衿丈
二尺九寸
衿巾
四寸五分
袖丈五尺
袖巾五尺
衿丈四尺
衿巾三寸

けて進むべし

○掛軸の扱ひやう
掛軸ハ掛竿と共小臺
にのせて持出すべし
又臺下のせざうて左
の手に掛軸の中程を
持ち右の手に掛竿を
持ふがら掛軸の端に
そへて持出つること



○衿の縫方

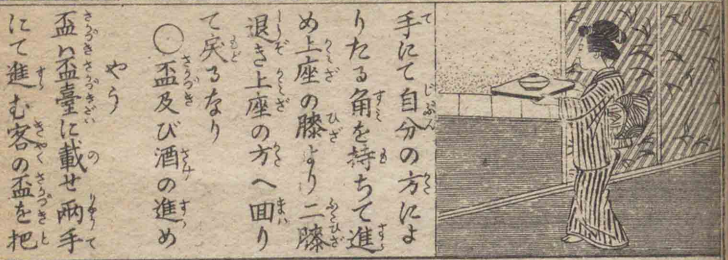
衿を縫ふに先脊筋をぬひ次に袖下を縫ひ次小腋すぢを
縫ひて之を他は置き俵裏地の脊筋を縫ひ袖下を縫ひて後
表と同じ様不両袖を縫ひ裾を合せて衿をふろし志つけを
かけるあり夫より脊筋をとぢ又腋とぢに及び裏と表の袖
口を縫ひ口を定め置きて四止をなすべし夫より袖下りら
袖口を縫ひ回りひつくりかへして表へ向け袖下より袖及於
肩より裾に至るまで志つけをなす而して表ららとの衿を
もちて裾を合せ身と衿との裾を定め四枚一時に縫合せて
袖小口を縫ふべし夫より又今一度ひつくりかへして衿の
上ふ志つけをなし衿と衿先とを縫ひ表へむけて衿巾を定
め志つけをのけるなり
又女子のものは初袖口をつけ小袖口を合せて袖下小縫

もあり襟持出して床
の前小跪居き臺を右
に置き掛軸を右の手に
みて取上げ左の手に
移し紐を右の手にて
とき小指の間にたさ
み掛軸の上を取り一
文字の邊まで開き床
の上小置き風帯あり
ハ右左と順不直し右
の手に掛竿を取ら掛
緒を扱ひ左の手にて
掛軸を持ち程よき所
まで開き右の足より
立ちて折釘へくけ竿

○綿入の縫方
綿入の縫方は初に篋付をなし袖下より袖口を縫ひ回り夫
より脊すぢ腋すぢをぬひ身の前より折りて衿をつけ次小衿
を付け裾を合せおきて表に折返し押へを為して綿を入る
るなりされども衿を付たるるときには衿の方へ折り衿を付
たるときは衿の方へ折るべきものなり又絹物をなるときは
両方の裾を縫ひて後綿を入るべし
綿の入やうは初身身の表をうららにむけ袖も亦此の如く
ふろし袖も身もうららあて別綿を入れ夫より袖をうし
ろより前へ返し前袖に綿を入れ後の身を前にひつくり返

左の脇より立ち、両手にて軸を持ち坐し、ながら皆開き、少し下りひざまづきて歪を直し復元の所にひざまづき一覽して次不字を臺に載せ持ち還るべし

○吸物膳の進め様
吸物膳を客に進むるには、両手にて目八分に持ち歩きて、客の前不至れ、蹴踏きて下座の膝より二膝程進みて膳を前におき、兩



○羽織の裁方
ありと雖も此處には先四身の單羽織及衿羽織の裁方を示さべし。乃ち圖の如くなるも袖付及び人形にて凡八寸の剩餘を生すべければ中間なるまきをを繼足して袖口と為すも可なり。又其衿肩は圖の如く圓

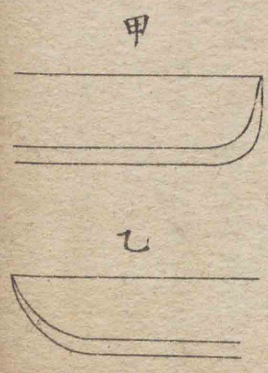
袖 九寸 三寸	袖 三寸	衿 六八 二寸	後 四寸七分	前 四寸七分	身 二尺五寸	織裁方 四寸七分	長一丈九寸 尺巾九寸 を以て四寸
袖 九寸 三寸	袖 三寸	衿 六八 二寸	後 四寸七分	前 四寸七分	身 二尺五寸	織裁方 四寸七分	長一丈九寸 尺巾九寸 を以て四寸

式逢蜀茶勺

し又前身へも綿を入れ裾へは程よく口わを入置き裾より脊裏のあき一處へむけて引繰返すなり。但綿に高低なきやう注意をべし

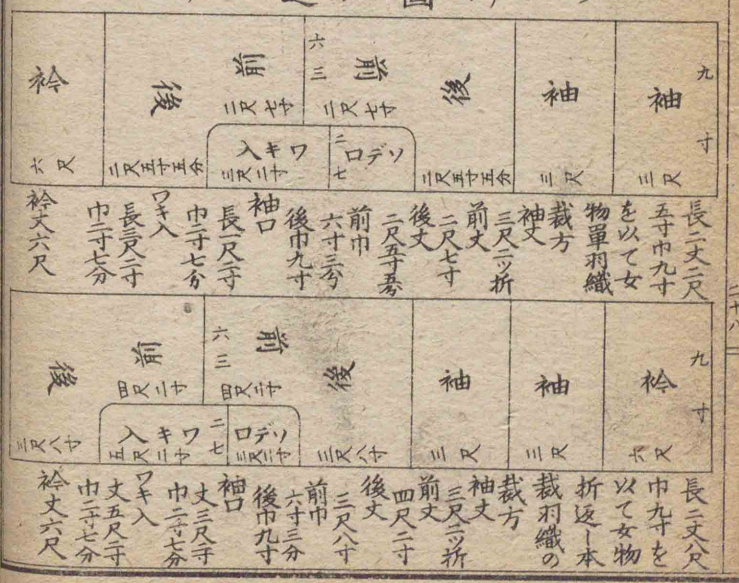
次は裾の縫方にして最も縫方小苦む所なり。然れば裁縫の巧拙も裾の形ふて知らずと云ふ而して其縫方左に示さる如く甲を蛤裾といひ乙を笹裾といふ。唯手加減一つにて巧拙あるものなり。其形は篋にても布片を折りてありとも線を付け弓形ある所は針目をこまかく縫ふなり

但はまぐり裾はをくびを大凡五分程なくせざれを出来上りの形甚不格好なるものなり



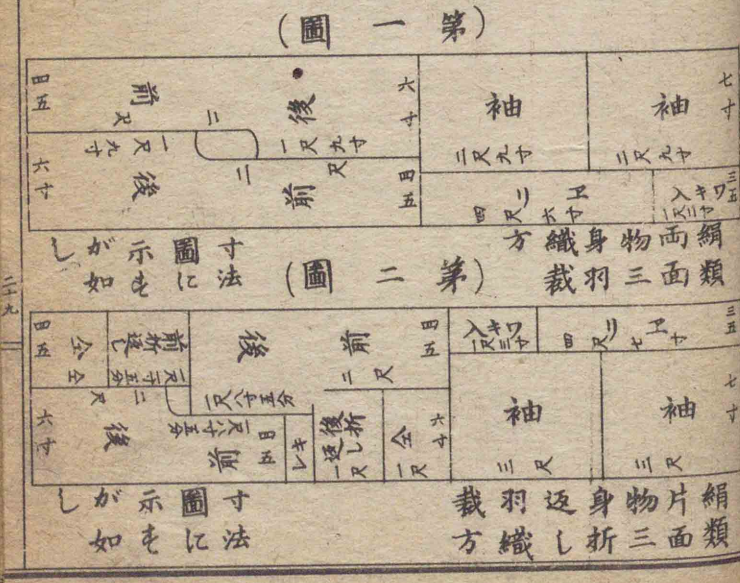
るときは臺を客の右の方に置くより酒を進むるに右の手に鈔子の弦を持ち左の手に鈔子の横を軽く押へ酌をせざるなり若酒陶のときは右の手にて酒陶の中程を持ち左の手を其底に添へて進むべし但酒は十分にづくべからざる若溢ることあれは客の其處置に困む故甚と無礼となるなり又酒陶の酒をつぎ

くはくちり
 ○女物羽織裁方
 女物の羽織を裁つにも亦種々あれど此處も本裁の方を示さべし即ち圖の如くにして下小掲ぐるものは折返しの本裁方あり此他略式裁の法ありて長二丈五尺よても裁つことを得べし茲も略せり



ふべし客の前にて酒を振り酒の有無を試むるは甚と無礼なり
 ○本膳の進めやう
 本膳を進むるは吸物膳を進むるに同じく持出で客の前にひさまづき膳を下の方斜に置き両手をつきて正面に進み先小進めたる吸物膳を上座に寄せ本膳を客の正面に進め上座の吸

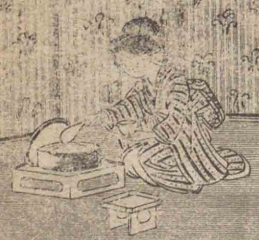
○絹類羽織の裁方
 此處は示す所の第一圖は三身羽織の裁方にして一尺五分巾の絹類長九尺七寸を以て裁つものなり但片面物にしては此圖は據り難し腋入は之を二つに二けて用ふべし少し短しと思はし衿の内にてよきに



物を持ち退くあり
 若二の膳を出すとき
 客の右の方に据へ
 三の膳を出すときは
 客の左の方より据るを
 り

客の汁を代るときは
 盆を両手に持ち椀を
 受けて退き持出づる
 ときは別な代蓋を為
 して客の前へひささ
 つき盆と共に下置
 き蓋を取りて盆の縁
 によせうけ両手ふて
 盆を持ち進むなり

○飯の進めやり
 飯櫃を臺に載せ杓子
 を添へて持出て上座
 の方に斜に置き両手
 をつきて二膝程搦寄
 り左の手を伸し拇指
 と食指とにて椀の底
 を撮み他の指及び右
 の指を添へて左の掌



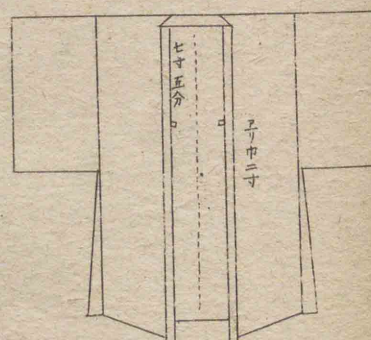
飯進めやり

第二圖は片面を絹類にて三身
 折返し羽織の裁方なり委しくは
 圖は就きて考ふべし

第三圖は巾一尺五分長一丈四尺
 六寸の絹類にて四身の前折返し
 裁方を示したるものにして後は
 總裏を付くるものなり此は餘り
 好むべき裁方あらざれども近
 來此法不より者多きを以て此處
 に併せ出さ唯其利便とする所は
 僅ふ一丈四尺餘の絹布を以て折
 返しの如く見するによきなり但腋
 入は十尺を度り残りを袖口と成

(圖三第)

二寸	八五	八五	二寸
袖	袖	袖	入キワ
五寸五分	五寸五分	五寸五分	五寸五分
五寸五分	五寸五分	五寸五分	五寸五分
五寸五分	五寸五分	五寸五分	五寸五分
五寸五分	五寸五分	五寸五分	五寸五分
五寸五分	五寸五分	五寸五分	五寸五分
五寸五分	五寸五分	五寸五分	五寸五分
五寸五分	五寸五分	五寸五分	五寸五分
五寸五分	五寸五分	五寸五分	五寸五分



羽織仕立上りの圖

○單羽織の縫方
 此縫方は先袖を縫
 ひ次ふ身頃の脊縫
 を為し後身の中を
 定めて腋入を付け
 正中より折て両方
 より縫込むこと下
 の圖の如し次小裾
 を縫ふは身の丈を定めて印をつけ後身は真直に縫ひ前
 身の腋入の両より前下りの斜に印を付ての丸つけをかけ裏
 へ折込みて細密不紵なるなり又の衿を付るの丸衿なれば二つ
 小折り耳の方を裏に縫付け脊縫より一尺下り處にて胴
 に乳を付け夫より衿中を極めて表へ紵あり但耳の垂る

裾へ飯櫃の方へ寄
り三杓子ほど盛りて
客ふ進むるなり但飯
を碗で盛るに杓子ハ
箸を持つが如くに左
し食指と中指とを揃
へて掌を上ふ向け輕
く揃ふが如く盛るべ
し洋杖を揃たる形
に杓子を持つは甚ど
賤き所為なり

○取肴の進めやう

取肴は先小皿に盛り
て膳又ハ盆ふ載せ客
の前にて膳を上座の
方へ斜に置き兩手に
て小皿を取り膳へ据
へ空膳又空盆を持下
りとせ

○茶菓子の進め様

巴不食事終れば茶と
菓子を進むべし其次
菓は前ふ述べたるも
の異なることなし
但本膳を引くふ二の
膳より引き下るべ
し三の膳あるときは
三の膳より二の膳本
膳と引くこと法式な
り

布片なれば耳の方を付るも耳の張る物なまば中より折り
て其折りたる所を付るものと知るべし又半巾の衿なると
きは先衿心の真直なるを取りて表の衿に伸縮みなきやう
縫付け前の如くにするなり尚茲に一の注意あり腋入を縫
終りたるとき其上の方は巾不多くの残りを生ず斯るとき
は内の方に真直に折りて一度紵置き表ふ針目の見えぬ様
ふ付置くこと最も肝要なり

○衿羽織の縫方

此縫方は先袖を縫ふこと衣服の如くお為し夫より裏と折
返しを継合せ四枚同時は表の方より縫ふべし此時裏と折
返しと縫ぎたる所をよく合せて待針を打ち置くこと大事
あり夫より人形をきめて腋入をこしらへ之を入れ後を縫
ふときは裏向に前を縫ふときは表向にまべし其前下り
を定むるは單羽織に同じく終りて
衿を付け次ふ袖を付て全く出来上
りとし

○縮入羽織の縫方

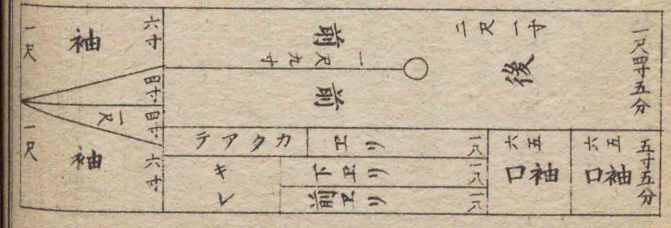
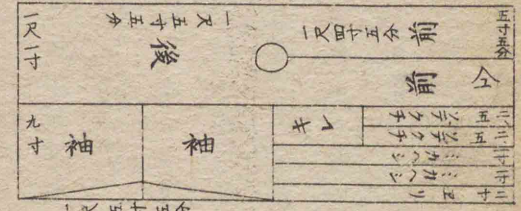
此縫方は先袖を付て表裏とも寸尺
を合せ(裏ハ一分許短く)別々小縫置
くべし夫より胴を縫ふよ折返しと
裏のきまを継合せ脊筋を表の上
より縫をトの裏の上にて留め次
袖付及び人形を定めて腋入をこし
らへ印をつけ待針を打ち表の上よ
り縫はじめて裏を回り裏の上にて
留め裏返して表より若つけをかく

四寸	三寸五分	六寸五分	六寸五分	六寸五分	六寸五分
袖	袖	袖	袖	袖	袖
九寸	九寸	九寸	九寸	九寸	九寸
長一丈三尺	二寸巾一尺	八寸を以て	男物羽織	折返し略	裁方
此ハ方今に用ひらるる裁方にて簡便なり但之より狭き巾にてハ裁ちがたし寸法ハ圖につきてあるべし					

裁縫新書

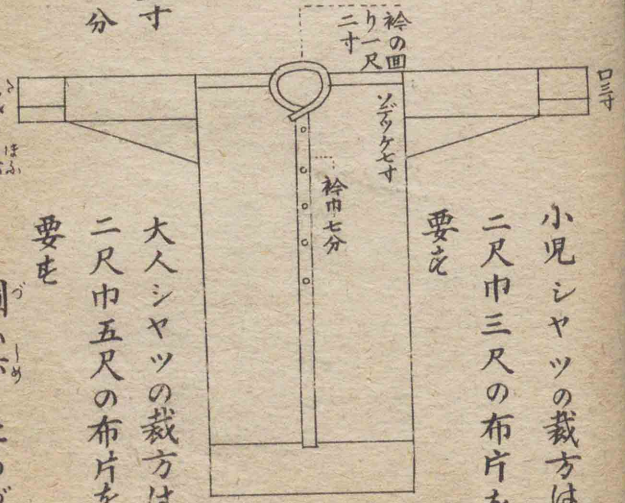
○客人着席の心得
 他の家にゆくは先方の主人より與ふる席上座と認むまじし下座に着くべし若其席の適當なりと認むるときは一度は辭することあるも強てい辭すべからず二度目の辭まよりて着座すべしされども通ひ路の妨げとあらぬやう又疊のへりなどにては坐すべしは是甚行儀に關係するも

べし但腋入て篋付を為すこと肝要あり夫より前巾にて下りを極め腋入ふ篋付の通り縫付け次は衿を裏不縫付くべし尤綿入に皆去つけをかくるあり又綿を入れ終らむ衿の所を裏と表と内より大針に綴付け夫より衿巾を極めて表へ新付け次不袖を付るなり



ものあればなり
 ○席上鼻のかき様
 鼻をかむに貴人の前にては次の間に立ちてかむべし若立つこと能えざる場合に下座の方に向ひ成べく音のせぬやうに音低くかむべし何れにても同席の人不向を脇の方又以後の方に向きてくむべきなり又食事中に鼻をうむは失礼あり其他欠び袖などは決し

○シャツの裁方
 前不示せるシャツの裁方其甲なるものは十歳位の小児のシャツの裁方にして袖の長さ八寸袖巾六寸五分前の長さ一尺四寸後身の丈は一尺五寸五分肩あけは一十八分と一たるなり
 乙の圖は大人のシャツを裁つ法にして圖不示たるが如き寸法を以て格好よく仕立候くるなり



小児シャツの裁方は
 二尺巾三尺の布片を
 要す
 大人シャツの裁方は
 二尺巾五尺の布片を
 要す

て為すまじきことな

又貴人の前にて烟草を吸ふべからず遠慮なき席に煙草を吸ふことあるも吸壳をそとくに音高くすべからず

○茶を飲み又菓子



○袴の裁方
袴は平袴襠高袴の二種あれども現今平袴を用ふる者稀なるを以て此處に襠高袴の裁方を示さべし先通常の襠高袴は巾九寸長二丈四尺のものをを用ふ

二尺四寸	二尺四寸	二尺四寸	二尺四寸	二尺四寸	二尺四寸	二尺四寸	二尺四寸	二尺四寸	二尺四寸
前	前	前	前	前	前	前	前	前	前
前	前	前	前	前	前	前	前	前	前
前	前	前	前	前	前	前	前	前	前
前	前	前	前	前	前	前	前	前	前
前	前	前	前	前	前	前	前	前	前
前	前	前	前	前	前	前	前	前	前
前	前	前	前	前	前	前	前	前	前
前	前	前	前	前	前	前	前	前	前
前	前	前	前	前	前	前	前	前	前

總て袴は前四中と後四中とより成るものにして裁方心得べきは二方みて寸法の幾分つか違ふものおればなり何故寸法の違ふといふは仕立上の圖示したる如く前の方中程の短きが故なり乃ち裁方は前の圖にて之を知るべし

茶を飲むに茶碗を右の手取り左の手を添へて飲むなり已不飲と終りたらハ徐に臺の上に置くべし菓子を食べるに懷中紙を出し箸ふて挟み取り紙の上に乗せ箸を元納め左右の手の指先にて菓子を二つに割り左の手に在るものを紙の上に乗置き右の手に在るものより食すべし

○袴の縫方
袴の縫方は先最初小奥布の一尺四寸の處へ襠の一尺四寸の處を縫付け襠の一尺五寸の處を前奥の筋違ひ小ありし處に縫合せ一方の二尺四寸の處へ前わきの二尺四寸の處を付け更に後奥の襠を付けたる一方二尺四寸六分あるところへ後わきの二尺四寸六分ある所を縫ふべし是を片方とをを

前脇の上より八寸五分の處小印をつけをより下を縫針留を為し次に裾を細かく紵まはし是より後脇四寸五分を裏へ折り紵付けべし

前脇は上を二寸五分表へ折り上を一寸に一を脇付の印の處まで篋付を為し大針に縫ひ外の方へ折返し中へ折り紵付くるなり

受け方及び箸の取りやう

膳を受けけるに膳を据る人目上の方ふれり
両手をつきを礼を為



し同輩の人ふれり
す両手をつき會釈す
るなり若給仕人なれ
ば挨拶するに及むを

以上を一方の縫方

と為る他の一方も

おれ不同じ楮襦を

縫ふに表へ一遍

返し縫ふべし

襷積は後の上の下

へ前を四寸五分上

まへを三寸三分の

處へ印を付け折目

正しく下まで折る

べし斯くするとき

は腰板の所は六寸五分と

楮高袴前

紐裁の方

長丈八尺

五寸巾九寸

五分を要す

丈二尺五寸

楮一尺五寸

巾九寸五分

前紐九尺

後紐二筋

一尺八寸づ

前 二尺五寸

前 二尺五寸

後 二尺五寸

後 二尺五寸

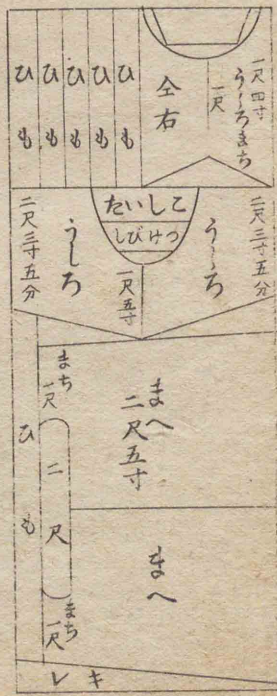
上はひだを右二つ左三つに一寸づの巾に折るべしこを

より腰板をつけ紐を付くるなり

○楮高

袴前紐

二尺巾



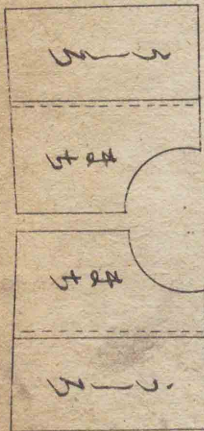
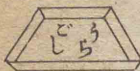
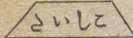
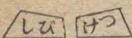
丈二尺五寸

楮一尺五寸

前紐九尺

後紐一尺八寸宛二筋

○楮高袴縫方圖解



成縫獨纂約

酒を受くるに酌人我が前を來らば次の客に會釈して右の手ふ杯を起り左の手を添へて酒を受けて飲了らば杯ハ吸物椀の側に置くべし

箸ハ右の手にて取り

左の手をそへて直し

物を食すべし箸を休

むるときは箸の本の

方を膳の右の縁に掛

けおき食し終りて膳

の下るときは箸を懐

中紙にて拭ひ膳の縁

にうけずして膳の内
に入し置くあり

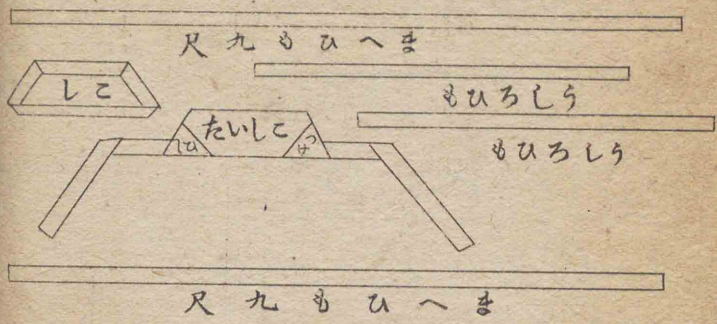
○飯の食ひやり

飯を食するに先飯
椀の蓋を取り膳の右
の脇へ仰向て置き又
汁椀の蓋をとりて飯
椀の蓋を重ぬ又平の
蓋をとりて飯椀の蓋



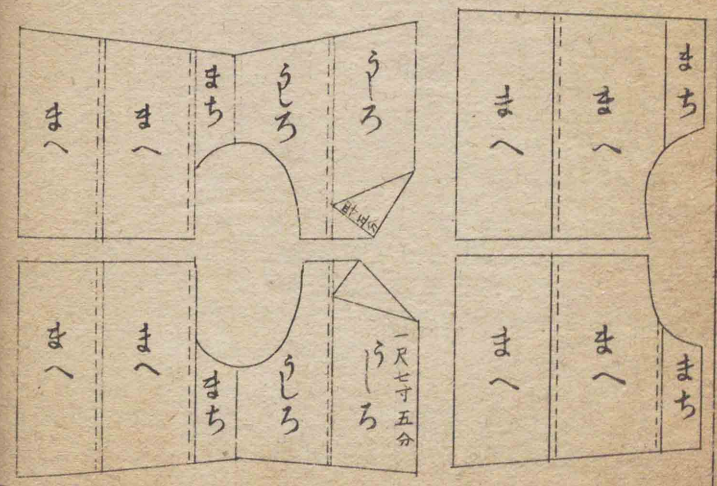
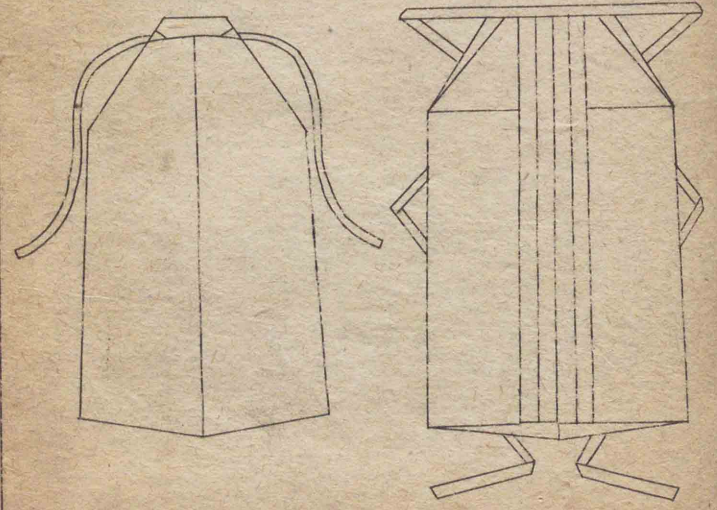
ひふらへ置くべし
諸飯の食様は右の手
に箸を持ちながら椀を
押へ左の拇指を火し
椀の縁にうけ餘の四
本の指を糸底を受
け飯を初め二箸ほど
二度目より三箸程宛
食すべし但三の膳迄
出でしときハ右の手
にて蓋を取り左の手
不移して膳の左の方
に仰向置くべし左の
物も右にて取るべし
宜し其順ハ飯汁平二

成筆 蜀山 句



○腹掛の裁方
腹掛に二種あり
襟腹掛と云ふ
掛は順の下迄
蔽ふことなく
恰も襦袢の衿
の如く見ゆる
物に之を龜腹
掛は専ら職人
の用ふるもの
あり左小其裁
方及び縫方の

襦袢高仕立の上のり圖



の汁坪と心得べし
汁吸物の類ハ右の手
を梳か添へ先汁を吸
ひ次に實を食し又汁
を吸ひて膳小置くか
り
總て食せんと欲して
箸をつけ更小他の品
に移り彼是と撰むを
迷ひ箸と云ふ甚と嫌
ふことなり

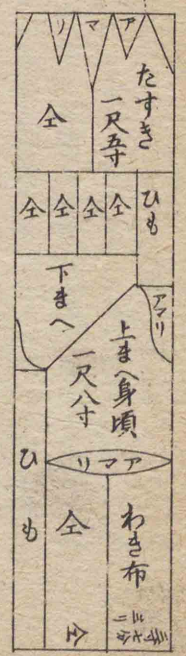
○小袖羽織の類着
せやう
をみたる小袖の類
を左右の手の小指に



て袖付の處を取り拇
指と無名指とにて袷
を引立て右の足より
立ちて後より左右と
順に着せるなり
帯は左右の手にて程
よき所を取り其人の
前より進むるなり
○袴の着せやう

圖解を示すべし

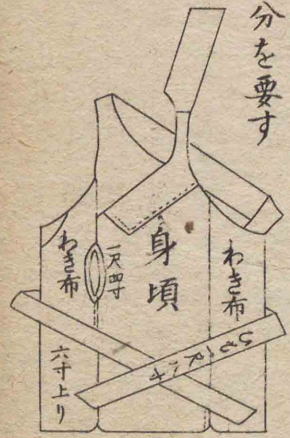
襟腹掛裁の方



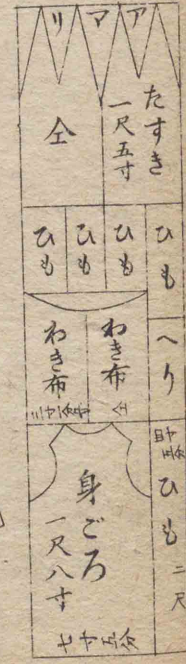
二寸二分

全縫上のり

布の長五尺にして
巾九寸五分を要す

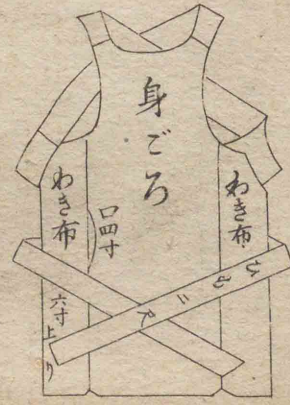


龜腹掛裁の方



全縫上りの圖

布の長五尺にして
巾九寸五分を要す



○股引の裁方
股引も亦種類ありて最も緩きもの有り最も堅きものあり
此處に其普通なるものを掲げ示す委しくは圖に就きて
考ふべし

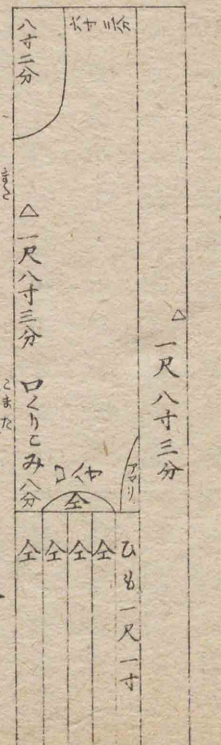
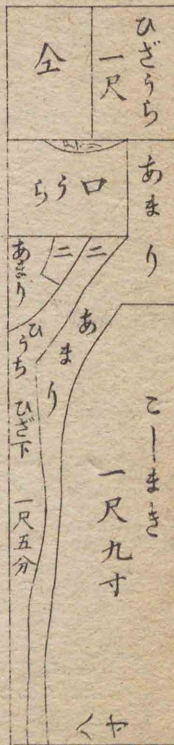
たみたる袴を持出
て紐を解き分け腰板
を左の手に取り前を
右の手よりとりて左右
へ開くせ進むなり
其人前腰を取り右の
足より著らる、故後
腰板の手を放し後よ
り左右の手にて前紐
を受取り帯の結び目
の上にて打違へ去り
と締め前へ出せ、其
人取りて前まで打違
へ復後へ出さる、故
受取りを帯の下にて



花結し締め端を紐ふ
挟み夫より腰板を當
て左右の紐を前の方
へ両手一揃不出せば
其人取りて之を結ぶ
故其間両手の拇指を
腰板に當て其締め終る
を待て之を放すべし
婦女禮式法終

裁縫蜀

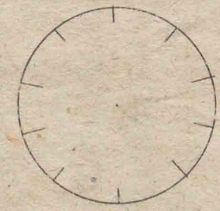
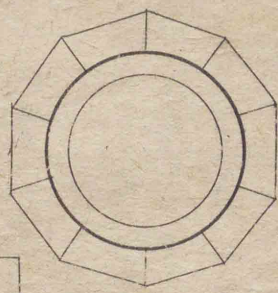
股引裁方圖解



丈二尺六寸 股一尺三寸 小股九寸 口八寸
膝口一尺五分 膝一尺にして是五一寸づゝ加
へて裁つを法とす

○大黒頭巾裁方
大黒頭巾を裁つは八寸四方の布を圓く切りひだを付る

小は十の割あり又さゝわたし八寸にてまより二尺四寸な
り此割にてひだを付る圖の如し

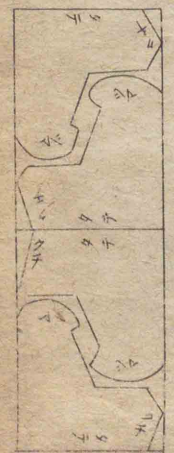


ひだを付るは頭
の寸法をとり是
を二尺四寸の内
にて引きとせ
ひだは折るあり

巾着裁方



紐足袋裁方



明治三十一年十二月二十八日印刷
同 三十三年一月二日發行

編輯者

綾 部 乙 松

本所區石原町九十二番地

印刷兼
發行者

岡 村 庄 兵 衛

淺草區左衛門町壹番地

發賣所

盛 花 堂

淺草區左衛門町壹番地



